(11) 麦の会－麦類関係者年１度の親睦会を楽しみに－

麦の会のルーツは、あまりはっきりしませんが、もう20年も遡ることになるでしょう。小麦は国策もあり、昭和44年（1969）には国立農試が小麦育種から撤退し、昭和47年（1972）には作付面積が7,700haまで減少しました。そんな折り、自給率ゼロを怖れた政府は、昭和49年（1974）に国内産小麦の「麦作緊急振興対策」を行い、生産奨励金による小麦価格の引き上げを行いました。そのころは、麦類の会議といっても、参集者が少なく、毎年農業試験会議の設計会議を行っていましたが、麦類分科会は寂しいものでした。
各分科会恒例の懇親会も同様に寂しいものであったため、麦類を担当したOBを仲間に入れての懇親会を計画したのが「麦の会」のルーツといえましょう。それでも当初は人数が少なく、身内の懇親会という感じでした。「ホロシリコムギ」、「タクネコムギ」が昭和49年（1974）に奨励品種になったこともあり、昭和53年からは、麦類を特定作物として、積極的な奨励策があったため、作付面積は急激に増加し、毎年２万ha余りずつ増え続け、昭和56年（1981）には10万６千haとなりました。このような小麦面積の増加とともに、試験研究の課題も増加し、昭和55年には、農業団体より北見農試に小麦育種関連施設が強化付設されるとともに、農業団体より研究員２人の応援を２年間受けました。

昭和56年（1981）に「チホクコムギ」が奨励品種となり、問題のある品種ではありましたが、めん用小麦であり、多収性であったため、「ホロシリコムギ」が中心であった品種構成が急激に「チホクコムギ」へ移行し、当初普及対象地域が道東の畑作地帯でしたが、道央の転換畑にまで普及してしまいました。

また、農水省も昭和57年に、北海道での小麦育種を羊が丘で再開しました。10数年のブランクがあったものの、国立農試が育種に加わったことの意味は非常に大きいものでした。育種目標など分担関係も明らかとなり、道立農試の秋まき小麦は、めん用小麦を、国立農試は秋まき小麦のパン用小麦を主目標とすることになりました。

このころになりますと、麦の会も盛会となり、新たな会員が毎年増加し続

け、40名を越えるようになりました。

会長は、北大を卒業後、当時の北海道農事試験場（琴似）に入られ、第2次大戦で召集されましたが、戦後無事帰国して復職、昭和22年に同場内に設置された札幌農事実験所に所属し、国費による小麦育種を担当していた楠　隆さんです。当時の配下には後藤寛治さん、宮浦学さん等がおられましたが、昭和25年の機構改革で、道立農試が設置され、楠　隆さんは北見支場（北見農試）長に転勤し、その時小麦の育種材料を一部分割し、その後「本系331号」として育成したのが「ホクエイ」なのです。そのほか会員には、国立農試で小麦育種を担当した佐々木正剛さん、えん麦の育種を担当し、発足当時幹事役でお世話をいただいた熊谷　健さん、田端　聖司さん、道立農試でのちに原原種を担当した宮浦　学さん、北見農試で大麦を担当した田辺安一さん、小麦を担当した長内　俊一さん、伊藤　平一さん、上野　賢司さん、佐々木　宏さん、二条大麦の育種を長く担当した成田　秀雄さん、畑作担当専技の山川　勉さん、山木　貞一さん、関口　明さん等、北海道米麦改良協会で長く小麦に係わった小林　和夫さん、それに長内さん以後歴代の中央農試畑作部長をされた方々も会員として迎えられています。

現在では、国立・道立農試の麦類試験担当の研究者・畑作担当専技とともに、ホクレン農総研の小麦研究者、北海道グリーンバイオ研究所の小麦研究者、現在他分野を担当していますが、もと麦類研究者であったものなどが会員なっています。平成元年には53名の会員でしたが、平成11年度の集まり（12.3.8）には約50名の参加で、麦談議に花を咲かせ、盛会のうちに制限時間となりました。とくに近年は、若い研究者の参加が多く、専門分野も作物分野から化学、バイテク分野まで幅が広くなり、1年1回の逢瀬ではありますが、OBの皆さんは大変楽しみにしている組織で、他分野にはないメンバー構成です。

現在、麦の会事務局は、河西郡芽室町にある北農試畑作研究センター麦育種研究室におかれ、恒例の親睦懇親会を年1回（3月の北海道農業試験会議（試験設計会議）にあわせて開催）行っています。麦の会に入って、麦談議に参加ご希望の方は、北農試畑作研究センター麦育種研究室または、北見農試小麦科にご相談下さい。

＜尾関　幸男＞